

恋愛心理尺度の作成と恋愛傾向の特徴に関する研究 － Lee の理論をもとに－

A study on constructing a psychometric scale of loving style and examining characteristics of loving style : On the basis of Lee's theory.

水野邦夫
MIDZUNO, Kunio

要 約

Lee (1977) は恋愛の色彩理論を提唱し、松井ら (1990) はそれに基づいた恋愛傾向測定尺度の日本語版を作成しているが、本研究では、より簡便で回答しやすい尺度の作成を試み、その妥当性および信頼性を検討するとともに、他の特性などとの関連性や、男女や恋人の有無によって、どのような恋愛傾向の違いがみられるかを調べることを目的とした。大学生および専門学校生466名（男子247名、女子217名、不明2名）を対象に、この尺度を含む質問紙調査を実施し、分析を行ったところ、尺度には十分な妥当性や信頼性は認められなかったが、さまざまな恋愛傾向を測定しうるものであることが確認された。また、ストルゲを除く尺度は協調的なパーソナリティ特性との間に有意な相関関係がみられた。さらに、恋愛傾向の男女差や恋人の有無による差を調べたところ、男子はアガペ（献身的な愛）やエロス（耽美的な愛）が高いのに対し、女子はプラグマ（実利的な愛）が高く、また、恋人がいる群はストルゲ（友愛的な愛）が低く、恋人がいない群ではマニアとエロスが低く、片思い群ではアガペが高いなどの結果が得られた。

Key Words : 恋愛の色彩理論, 尺度構成, 恋愛の性差, 恋人の有無による恋愛の違い

恋愛は、われわれ人間にとって、最も興味を惹くテーマのひとつであると言っても過言ではないであろう。古今東西の芸術作品において、恋愛を題材にしたものは枚挙にいとまがない。また、実に多くの人々が恋愛に関する箴言や名言を残してきた。そして、おそらくほとんどすべての人間が、恋愛について一家言を持ち、独自の恋愛理論をさまざまな形で展開しているのであろう。

しかし、これほど重大なテーマである恋愛が、心理学において実証的な研究として始められるようになったのは、それほど古いことではないようである。山際（2001）は、恋愛を測定する尺度として最も古いのはGross（1944）のロマンティシズム尺度であろうとしている。1960年代ごろから実験的研究もみられるようになり、Walster, Aronson, Abrahams, & Rottman（1966）は、いわゆる「コンピュータデート実験」で、デートのパートナーへの好意度には、学業成績や性格よりも、外見的魅力が最も関連することを明らかにし、Byrne, Ervin, & Lamberth（1970）は、やはりコンピュータデート実験で、性格の類似度が高い人物の方が魅力を感じやすいことを見出している。その後も、Dutton & Aron（1974）のいわゆる「吊り橋実験」など、興味深い研究が発表されている。

ところで、恋愛研究の進展とともに、恋愛に関するさまざまな理論が提唱されるようになった。まず恋愛と好意を区別して捉えたものとして、Rubin（1970）の研究がある。Rubinは両者を弁別するために恋愛尺度と好意尺度を作成している。一方、Davis（1985）は、恋愛感情は友情に魅惑や性的衝動、排他性、あるいは擁護、最大の援助が加味されたものとするモデルを提唱している。また、Sternberg（1988）はトライアングル理論を提唱し、親密性、情熱、決心／コミットメントという3つの成分をもとに、恋愛にはそれらの組み合わせも含めて7種類の型があると述べている。その他に、Shaver, Hazan, & Bradshaw（1988）は、恋愛関係と乳幼児期の母子関係との類似性に着目し、アタッチメント、養護、セクシャリティの側面から恋愛を説明しようと試みている。

このように、1970年代以降、さまざまな恋愛理論が提唱されてきたが、なかでも代表的なもののひとつとして、Lee (1977) の色彩理論がある。Lee は恋愛を色相環になぞらえ、原色というべきいくつかの恋愛のタイプがさまざまに織り成して現実の恋愛が存在すると考え、多くの文献などをもとに、恋愛をアガペ (献身的な愛)、ルダス (遊びの愛)、マニア (狂气的な愛)、プラグマ (実利的な愛)、エロス (耽美的な愛)、ストルゲ (友愛的な愛) の6類型にまとめ上げた。さらに、Hendrick & Hendrick (1986) は、この理論に基づいた恋愛尺度を作成し、恋愛傾向の性差などについて検討している。

色彩理論は、わが国でも関心を集め、中村 (1990) はHendrick & Hendrick (1986) の尺度の日本語版を作成し、また松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田 (1990) もHendrick & Hendrick (1986) を参考にLETS-2 (Lee's Love Type Scale 2nd version) を作成している。松井 (1993b) は、LETS-2を用いて、Leeの理論を再検討しているが、6つの類型は、Leeの言うような環状構造ではなく、エロス・アガペ・マニアと他の3類型を頂点とする四角構造か三角錐構造とみるのが妥当ではないかとしている。

LETS-2は色彩理論に基づいた恋愛傾向測定尺度として、松井ら (1990) 以外にも広く紹介されており (松井, 1993a; 山際, 2001), 尺度の入手が容易なので、この尺度を用いてさらに恋愛研究を進展させることが期待できるが、LETS-2には回答に際していくつかの問題点があるのではないかと考えられる。まず、項目の中に冗長で難解な表現が目立つ点である。たとえば、「私は、彼 (女) に対してどう関わっているかについて、少し曖昧にしておこうと気をつけている」や「私自身の幸福よりも、彼 (女) の幸福が優先しないと、私は幸福になれない」などは、よく読めば理解できる内容ではあるが、回答者がすぐに理解するにはやや不親切なきらいがあると思われる。このような文章が見られる原因としては、LETS-2がHendrick & Hendrick (1986) を参考に作成されたために、翻訳調の表現が目立つことがあると思われる。次に、項目数は57であるが、表現の冗長さや難解さを考慮すると、少し多いの

ではないかと思われる。さらに、尺度得点の算出方法がストルゲだけ異なっており、できればこれも統一した方が混乱が少なくて済むであろう。はじめに述べたように、恋愛はほとんどすべての人が興味を持つテーマである。それゆえに、多くの人にとって回答し、得点を算出しやすい尺度を作成した方がより有意義ではないかと思われる。

そこで本研究では、多くの人にとって回答しやすいことを目標に、Lee (1977) の色彩理論に基づいた尺度を再構成することを第一の目的とする。さらに、その尺度を用いて、恋愛傾向の男女差や、恋人の有無による恋愛傾向の違いを検討することを第二の目的とする。

方 法

尺度項目の作成 Lee (1977) や松井ら (1990) , 松井 (1993a) などを土台に、アガペ、ルダス、マニア、プラグマ、エロス、ストルゲ的な恋愛行動を6つずつ考え、質問項目の文章を作成し、恋愛心理尺度を構成した。質問項目をTable 1に示す。

被調査者 平成16 (2004) 年から平成18 (2006) 年にかけて、滋賀県内の2大学および1専門学校で、心理学関連の授業を受講した学生に対し、調査への協力を依頼し、データの提供を依頼したところ、466名 (男子247名, 女子217名, 不明2名) がそれに応じた。なお、平成16年にデータ提供に応じた被調査者は138名 (A大学生男子62名, 同女子27名, 専門学校生男子3名, 同女子44名, 不明2名), 平成17年は179名 (B大学生男子82名, 同女子54名, 専門学校生男子11名, 同女子32名), 平成18年は149名 (B大学生男子89名, 同女子60名) であった。

心理尺度 恋愛心理尺度の特徴を明らかにするために、平成17年, 18年の大学生被調査者に対しては下記の心理尺度を用意した。

Table 1 恋愛心理尺度項目

項目	恋愛 タイプ	項 目
1	S	私たちは、友達どうしだったのが、いつのまにか恋人の関係になってしまった。
2	M	恋人が他の異性の人と楽しそうに話をしているのを見たら、気になって仕方がない。
3	L	特定の恋愛相手を決めたくはない。
4	A	恋人のためなら、たとえ自分が犠牲になっても、たいていのことはできる。
5	E	私は恋人に一目惚れしてしまった。
6	P	他人に自慢したいために、優れた恋人を見つけようとするところがある。
7	S	たとえ恋人と別れることがあっても、よい友達どうしのままでいることができると思う。
8	M	恋人のケータイの着信履歴をチェックしたくなる。
9	L	恋人とは、定期的にはではなく、自分の気が向いたときにだけ会う。
10	A	私は「恋人に尽くす」タイプの人間だ。
11	E	私たちはお互いが好きどうしの、いわば「ラブラブな」関係だ。
12	P	結婚をするなら、絶対にお見合い結婚の方がいい。
13	S	自分にとっては、友達づきあいみたいな恋愛が合っていると思う。
14	M	恋人が浮気をしたら、何があっても絶対に許さない。
15	L	恋人にベタベタされるような恋愛は面倒くさくてイヤだ。
16	A	恋人が自分のことをそれほど愛していなくても、私は恋人のことを愛したい。
17	E	私たち2人の愛は永遠のものだ。
18	P	恋人を選ぶときには、世間体（周囲の目）も気にして、それなりの人を選ぶ。
19	S	私の恋愛は、激しいというよりも穏やかで地味なほうだ。
20	M	気がつくのと、いつも恋人のことばかり考えている。
21	L	恋人に何かと干渉されたり、束縛されたりすると、別れたい。
22	A	恋人のためなら、どんなことでもがまんできる。
23	E	私と恋人は、生まれ変わってもまた同じ恋人どうしだろう。
24	P	恋人を選ぶとき、相手が自分より格が上か下かを気にする。
25	S	私たち2人は、恋人どうしというよりは、仲のいい友達どうしといった方が当たっている。
26	M	恋人には、いつも私のことだけを見つめていてほしい。
27	L	恋愛をゲームのように楽しみたい。
28	A	恋人さえ幸せになってくれるのなら、私は何も望まない。
29	E	2人の愛をいつまでも大切にしたいと気を使っている。
30	P	私にとって恋愛とは、ある意味、目的ではなく手段である。
31	S	私は恋人のことを親友だとも思っている。
32	M	恋人から突然「別れ」を告げられたら、泣き叫んでしまうかもしれない。
33	L	いわゆる「二股（ふたまた）をかける」のは、世間の人と言うほど悪いことだとは思わない。
34	A	恋人が悪いことをして非難されることがあっても、私は常に恋人の味方だ。
35	E	恋愛とは夢のようにロマンチックなものだ。
36	P	本音を言うと、恋人には愛情よりも、経済力や地位を求めたい。

註 S:ストルゲ、M:マニア、L:ルダス、A:アガペ、E:エロス、P:プラグマ

1) 主要5因子性格検査 (村上・村上, 1997) 性格の5因子 (Big Five) モデルに基づいて作成されたもので、外向性, 協調性, 勤勉性, 情緒安定性, 知性を測定するものである。検査は各12項目計60項目からなる (なお, 実際には「建前尺度」10項目を含む70項目から構成されているが, 本研究では建前尺度は実施しなかった)。

2) Kikuchi's Scale of Social Skill (KiSS-18, 菊池, 1988) 社会的スキルを測定する尺度で, 18項目からなる。

手続き 尺度等は, 「これから自身の恋愛のタイプを調べる恋愛心理テストを行うので, 当たるかどうかを確認してほしい」と説明し, 授業時間の一部を利用して実施した。実施時期は各年とも6月であった。なお, 実施年ごとに以下の通り実施手続きは異なっている。

平成16年は, 質問項目の印刷されていない回答用紙を配付し, スライドに質問項目を呈示し, 各項目について自分がどれくらいあてはまると思うかを所定の欄に5段階で評定させた。なお, 項目の中には実際に恋人がいないと判断できない項目も含まれているので, 「自分には恋人がいないという人は, 『もしいたら, たぶんこうするだろう』と予測して回答してみてください。」と教示した。

回答後, 各タイプの得点を自己採点させ, その後, 「最も得点が高かったものがあなたのタイプです」と説明し, 各タイプの特徴 (Table 2 参照) を呈示した。最後に, 「この心理テストはまだ開発途上の段階で, より精度を高めるためにデータを集めているのですが, もしデータを提供してもよいという人は, 性別と恋人の有無 (いる, 片思いしている人がいる, 特にいない) および結果がどれくらいあたっていると思うか (5段階評定) を所定の欄に記入の上, 提出してください。」と依頼し, 無記名で提出させた。

平成17年は, 質問項目等が印刷された回答用紙を配付し, 同時にスライドにも質問項目を呈示しながら, 平成16年時と同様に, 各項目への回答を求めた。回答後は同じく各タイプの得点を自己採点させ (回答用紙の所定欄に得点を記入させた), 各タイプについての説明を行った。最後に, データ提供

Table 2 各恋愛タイプの特徴について

<p>アガペ (献身的な愛)</p> <ul style="list-style-type: none"> *相手の利益だけを考え、相手のために自分自身を犠牲にすることもいとわない。 *嫉妬をしないで、相手のために気を使う。 *しかも自分からの愛に見返りを求めない。 *お返しに自分を愛してくれることさえも求めない。 	<p>プラグマ (実利的な愛)</p> <ul style="list-style-type: none"> *恋愛を何かの目的を達成するための手段と考えている。 *その目的に応じた相手を選ぼうとする。 *自分に釣り合った (あるいは自分よりも格が上な) 相手を選ぼうとする。 *相手が自分の目的を満たせないと分かると、恋愛をやめてしまう。
<p>ルダス (遊びの愛)</p> <ul style="list-style-type: none"> *恋愛をゲームとして捉え、楽しむことを大切に考える。 *交際相手に執着せず、嫉妬や独占欲を示さない。 *複数の相手とも交際することができる。 *その場合、どの相手とも距離をとって付き合う。 *相手が自分のプライバシーに足を踏み入れることを好まない。 	<p>エロス (耽美的な愛)</p> <ul style="list-style-type: none"> *きわめて強い一目惚れを起こす。 *その場合、胸がときめき、張り裂けそうな感じになる。 *恋人の中に自分の理想を見つけ出す。 *相手の美しさを褒め讃える。 *恋愛を至上のものとする。 *恋人のために詩を書いたり、歌を作ったりすることもある。
<p>マニア (狂氣的な愛)</p> <ul style="list-style-type: none"> *独占欲が強く、激しい感情を持つ。 *強迫的、嫉妬深く、熱中するタイプ。 *自分が愛されているかどうか、何度も確認したくなる。 *相手が他の異性と話をするだけで、嫉妬したり、心配になったりする。 *不安になりすぎて、食欲がなくなったり、体調が悪くなったりすることもある。 	<p>ストルゲ (友愛的な愛)</p> <ul style="list-style-type: none"> *穏やかな、友情的な恋愛。 *長い時間をかけて、知らず知らずのうちに愛が育まれるタイプ。 *自分たちが恋愛していることに気づかないまま付き合っている場合もある。 *友情や仲間意識に近い恋愛。 *相手に嫉妬したり、不安を持ったりすることがない。 *遠距離恋愛をしても、特に問題はない。

註：松井(1993a)を参考に作成

の依頼を行い、データ提供を承諾する場合には、学籍番号、氏名、性別、恋人の有無 (いる、片思いしている人がいる、いない) および結果がどれくらいあたっていると思うか (5段階評定) を所定の欄に記入し、さらに回答用紙に印刷されている他の質問項目について、同様に5段階で評定し、提出す

るように指示した。なお提出に際して、個人のデータが漏洩されないように十分に配慮すること、提出してもらった場合には、「調査協力点」としてこの授業の評価点に3点分加算すること、などを約束した。

平成18年は、17年時と同様の方法で実施したが、結果がどれくらいあまっていると思うかについては尋ねなかった。

その他、平成17年、18年には恋愛心理尺度の実施時とは別の時間に主要5因子性格検査、KiSS-18を実施した（いずれも5段階評定での回答を求めた）。なお、データ提供の承諾に関しては、恋愛心理尺度の場合と同様の指示を与えた。

結 果

平成17、18年実施分については、回収したデータのうち、質問項目には回答しているが、学籍番号と氏名が無記名の者は分析から除外した。また、以後の分析において欠損値のあるデータは分析の都度に除外した。

恋愛心理尺度の因子分析 恋愛心理尺度の構造を調べるために、確認的および探索的因子分析を行った。なお、今回の調査は足かけ3年にわたり実施され、しかも年ごとに実施方法もかなり異なるため、全てを込みにして分析を行うことには問題があるかもしれないが、いずれの場合も、実施にあたり「恋愛心理テストを行う」と告げて興味を惹かせるなどの配慮を行っており、被調査者のモチベーションは同程度に高まっていると考えられるので、敢えて全てを込みにした分析を行った。

まずはじめに、6つの恋愛タイプに関する確認的因子分析を行ったが、 $GFI = .835$ 、 $AGFI = .811$ 、 $RMSEA = .058$ 、 $AIC = 325.70$ など、モデルの適合度はそれほど高くないと考えられる。また、探索的因子分析（主成分解、Promax回転、6因子指定）も行ったが、アガペやエロス、マニア、ストルゲに関連する因子は見出されたものの、ルダスやプラグマに関する因子は明確に見出すことができなかった（Table 3参照）。

さらに男女別に同様の分析を行ったが、確認的因子分析ではいずれも適合

Table 3 恋愛心理尺度の探索的因子分析結果 (因子パターン)

項目番号	恋愛のタイプ	I	II	III	IV	V	VI	h^2
22	A	.829	-.106	.020	.001	-.050	.008	.627
4	A	.786	-.067	-.015	.007	.024	-.108	.624
28	A	.758	-.094	-.164	-.031	.055	.108	.515
16	A	.663	-.015	-.152	-.013	.075	.170	.413
10	A	.641	-.026	.193	-.042	.018	-.046	.503
34	A	.545	.085	.041	.165	.032	-.088	.366
5	E	.402	.303	.055	.100	-.070	.354	.362
29	E	.376	.367	.137	-.085	.046	.159	.434
36	P	-.396	.058	.139	.269	-.007	.327	.475
15	L	-.399	-.151	-.134	-.097	.174	.286	.487
21	L	-.530	-.167	.027	-.084	.154	.102	.433
17	E	-.023	.857	-.032	-.132	-.036	.152	.694
11	E	-.191	.782	-.032	.003	.048	-.120	.562
23	E	.110	.747	-.008	-.017	-.008	.105	.599
35	E	-.021	.621	.116	.043	.059	.015	.417
20	M	.332	.376	.202	-.074	.111	-.097	.539
2	M	.242	.019	.648	-.106	.097	-.053	.558
8	M	.032	.084	.609	-.007	.092	.102	.401
14	M	-.260	.128	.556	-.082	-.011	-.071	.366
26	M	.164	.216	.549	.043	-.030	-.136	.574
32	M	.085	.337	.348	-.065	.030	-.103	.398
7	S	.190	.231	-.379	.116	.247	-.030	.269
27	L	-.080	.136	-.024	.735	.138	-.178	.540
33	L	.165	-.099	-.195	.657	-.026	-.082	.414
3	L	-.029	-.073	-.037	.617	.084	.030	.437
30	P	.074	-.091	-.067	.538	-.013	.142	.356
6	P	.019	-.070	.415	.478	-.082	.185	.513
25	S	.012	-.060	.005	.064	.802	.064	.685
13	S	-.139	-.120	.094	.035	.752	-.051	.595
1	S	-.025	.133	.147	-.033	.642	-.035	.411
31	S	.155	.132	-.162	.070	.619	-.030	.464
12	P	-.041	.259	-.209	.067	-.155	.662	.460
19	S	.120	-.114	-.072	-.301	.205	.549	.424
24	P	.006	-.150	.400	.061	-.024	.512	.443
18	P	-.058	-.031	.374	.259	-.006	.437	.469
9	L	-.191	-.033	-.200	.145	.173	.239	.301
寄与		4.579	3.401	2.641	2.311	2.305	1.892	
説明率		12.72%	9.45%	7.34%	6.42%	6.40%	5.25%	

次ページに続く

因子間相関

	I	II	III	IV	V
II	.425				
III	.164	.305			
IV	-.239	-.144	.086		
V	-.006	-.086	-.175	.047	
VI	-.268	-.303	-.090	.267	.134

註：A：アガベ、E：エロス、P：プラグマ、L：ルダス、M：マニア、S：ストルゲ
 ゴシック太字は因子負荷量の絶対値が.40以上であることを表す。
 N=462

度がさらに低く、探索的因子分析では、男女で因子構造はかなり異なるが、いずれもアガベ、エロス、ストルゲに関連する因子は見出された。

タイプの因子分析 次に、6つの恋愛タイプ尺度得点（各タイプを表す項目の素点の合計得点。以下同様）について、先と同様の因子分析を行った。なお因子数は、Kaiser-Guttman基準により、3因子とした。因子パターンをTable 4に示す。Table 4から、第1因子はアガベ、エロス、マニアが、第2因子はプラグマとルダスが、第3因子はストルゲが、それぞれ高く負荷しているのがわかるが、松井（1993b）とほぼ同様の結果が得られた（ただし、松井は主成分分析による）。また、男女別にも同様の分析を行ったが、いずれも同様の因子パターンが得られた。

被調査者の的中感との関連 平成17年のデータでは、6つの尺度得点を自己採点させ、最も得点が高いものを各自のタイプとしたうえで、Table 2の説明を参照させ、結果がどれくらい当たっていると思うかを5段階で評定させた¹⁾。そこで、各得点で同点1位のもものがなく、なおかつ正確に自己採点できているデータについて、自身の該当するタイプがどれくらいあたっていると思うかを集計した。その結果をTable 5に示す。Table 5から、プラグマ以外のタイプに該当するとされた者は、それぞれ70%以上が「非常に当たっている」もしくは「やや当たっている」と感じているのがわかる。

各タイプ尺度の内的整合性 次に各タイプ尺度の内的整合性を調べるために、Cronbachの α 係数を算出した。その結果をTable 6に示す。全体的に、ア

1) 平成16年時にも同様の質問を行っているが、このときは自己採点の点数を記入させなかったため、被調査者が正しく値を算出しているかどうか不明である。よって、17年実施分のみを分析対象とした。

ガペ、エロス、マニアの内的整合性が高く、とくにルダスの内的整合性は低い傾向にあるといえよう。また、男女別にも算出したが、大きな違いはみられなかった。

Table 4 6タイプの因子パターン

恋愛のタイプ	I	II	III	h^2
マニア	.889	.144	-.139	.773
エロス	.859	.004	.066	.732
アガペ	.555	-.371	.277	.628
プラグマ	.189	.951	-.017	.833
ルダス	-.331	.636	.228	.697
ストルゲ	.011	.053	.963	.927
寄与説明率	2.013 33.54%	1.500 25.00%	1.078 17.96%	

因子間相関

	I	II
II	-.298	
III	-.071	-.018

註：ゴシック太字は因子負荷量が.40以上であることを表す。
N=462

Table 5 各タイプの的中感について

	アガペ		ルダス		マニア		エロス		ストルゲ	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
非常に当たっている	8	1	2	2	2	3	1	2	7	4
やや当たっている	5	1	1	2	2	7	2	7	9	10
どちらともいえない	2	0	0	0	0	5	0	1	1	1
あまり当たっていない	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0
全く当たっていない	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1

註：数字は度数を表す。プラグマについては、該当者はいなかった。

Table 6 各尺度の α 係数

	全体 ($N = 464 \sim 466$)	男子 ($N = 246 \sim 247$)	女子 ($N = 216 \sim 217$)
アガペ	.804	.774	.796
ルダス	.591	.591	.603
マニア	.734	.666	.784
プラグマ	.656	.676	.637
エロス	.763	.729	.801
ストルゲ	.630	.614	.654

性格特性・社会的スキルとの関連性 平成17, 18年時には村上・村上 (1997) の主要5因子性格検査, 菊池 (1988) のKiSS-18も実施しているが, 各性格特性, 社会的スキルと各恋愛のタイプの関連性を調べるために, 両者の相関関数を算出した (ただし, データは大学生のみ)。なお, これらの尺度得点は各項目の素点の合計点を用いた。その結果をTable 7に示す。

Table 7 各タイプと性格特性、社会的スキルとの相関

	アガペ	ルダス	マニア	プラグマ	エロス	ストルゲ
外向性	全体 .093	-1.109 +	.177 **	-.105	.159 *	-.027
	男子 .076	-.116	.210 *	-.209 *	.194 *	-.134
	女子 .194 +	-.109	.143	.011	.162	.142
協調性	全体 .328 ***	-.324 ***	.209 **	-.351 ***	.340 ***	-.075
	男子 .353 ***	-.328 ***	.329 ***	-.343 ***	.424 ***	-.181 *
	女子 .335 ***	-.320 **	.090	-.361 ***	.256 **	.062
勤勉性	全体 .109 +	-.101	-.039	-.071	.090	-.020
	男子 .074	-.068	.007	-.011	.103	-.088
	女子 .053	-.135	-.091	-.113	.014	.067
情緒安定性	全体 -.113 +	-.004	-.217 ***	-.127 +	-.072	.039
	男子 -.162 +	.042	-.262 **	-.038	-.197 *	.171 *
	女子 -.161	-.066	-.173 +	-.225 *	.034	-.173 +
知性	全体 .185 **	.009	-.009	.000	.146 *	-.058
	男子 .048	.050	-.040	.003	.098	-.193 *
	女子 .184 +	-.014	.013	.044	.111	.073
社会的スキル	全体 .185 **	-.115 +	.034	-.125 +	.158 *	-.026
	男子 .038	-.041	.005	-.097	.173 *	-.068
	女子 .249 *	-.196 *	.058	-.125	.088	.013

註: *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

全体: $N = 236$, 男子: $N = 134$, 女子: $N = 102$

とくに絶対値で.30以上の有意な相関がみられたのは、アガペ、エロスと協調性（正の相関）、ルダス、プラグマと協調性（負の相関）、エロスと友人満足感（正の相関）であった。また、男女別にも相関係数を求めたが、ほぼ同じ傾向がみられた。ただし、男子はマニアと協調性の相関が.30を超えるのに対して、女子は無相関に近いという違いがみられた。

性差・恋人の有無による尺度得点の違いについて 各恋愛タイプ尺度得点について、男女差や恋人の有無による差がみられるかどうかを調べるために、それぞれの平均尺度得点等を算出し（Figure 1からFigure 6を参照）、各得点を従属変数とした2（性別）×3（恋人の有無）の分散分析を行った。

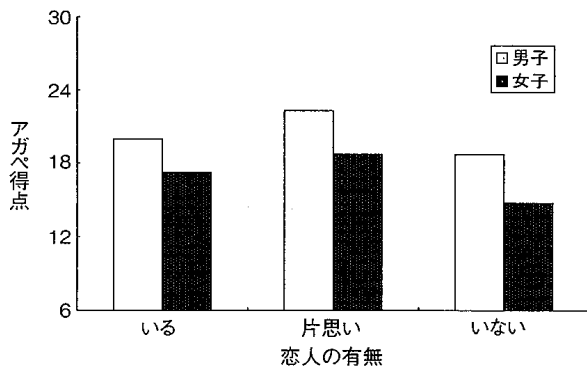


Figure 1 男女、恋人の有無によるアガペ得点

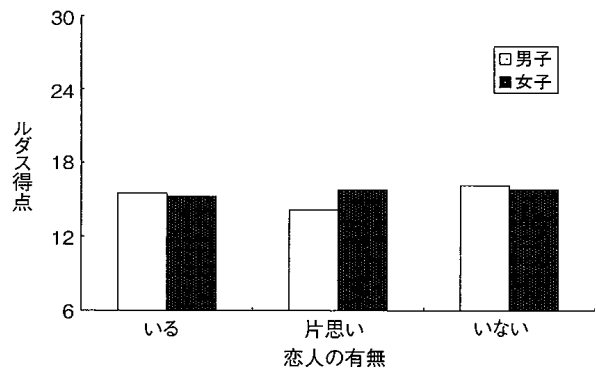


Figure 2 男女、恋人の有無によるルダス得点

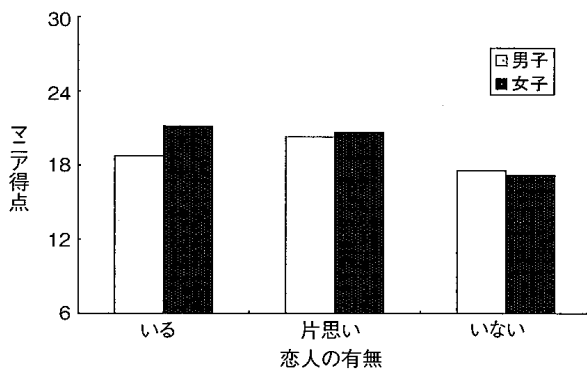


Figure 3 男女、恋人の有無によるマニア得点

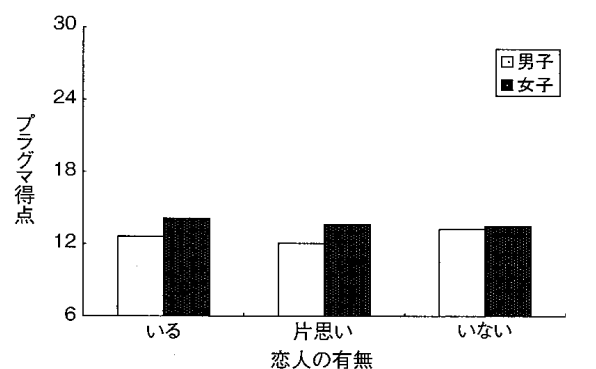


Figure 4 男女、恋人の有無によるプラグマ得点

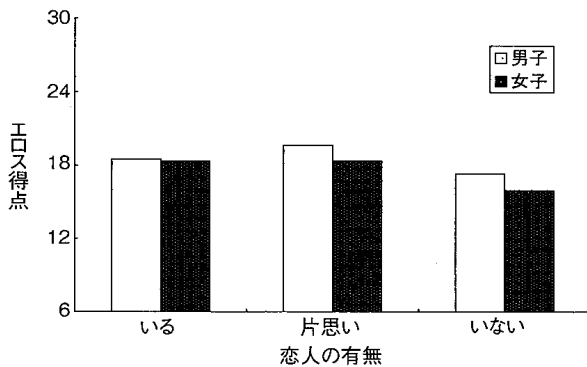


Figure 5 男女、恋人の有無によるエロス得点

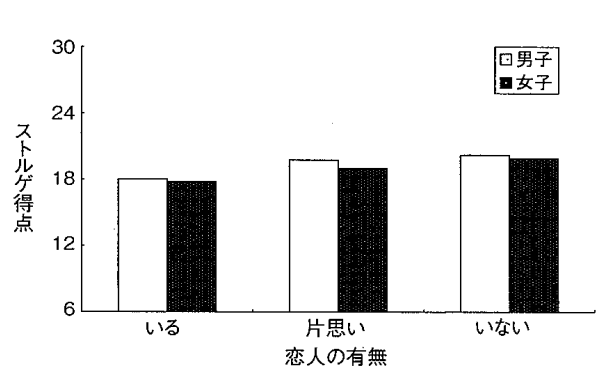


Figure 6 男女、恋人の有無によるストルゲ得点

その結果、性別の主効果が有意であったのは、アガペ、エロス、プラグマで（各、 $F(1,375) = 59.96, p < .001$; $F(1,375) = 4.75, p < .05$; $F(1,374) = 4.04, p < .05$ ），アガペとエロスは男子の方が高く、プラグマは女子の方が高かった。

恋人の有無の主効果が有意であったのは、ストルゲ、マニア、アガペ、エロスで（各、 $F(1,375) = 6.99, p < .01$; $F(1,375) = 16.41, p < .001$; $F(1,375) = 22.58, p < .001$; $F(1,375) = 8.88, p < .001$ ），多重比較としてNewman-Keuls検定を行ったところ、ストルゲでは恋人がいる群は他の2群よりも得点が低く、マニアとエロスでは恋人が特にいない群は他の2群よりも得点が低く、アガペではいずれの群間にも有意な差が認められ、片想いをしている人がいる群 > 恋人がいる群 > 特にいない群の順に得点が高かった。

両者の交互作用については、マニアで有意な差の傾向が認められる程度で（ $F(1,375) = 2.44, p < .10$ ），有意な差は認められなかった。

考 察

尺度の信頼性・妥当性について 本研究では、Lee (1977) の恋愛の色彩理論に基づいて、松井ら (1990) のLETS-2などを参考にしながら、新たな恋愛心理尺度を作成した。尺度を因子分析した結果、Leeが指摘するような6つの因子を明確に求めることはできなかった。これについて、松井 (1993b) はエロス、アガペ、マニアがひとつのまとまった恋愛意識であり、他の3つは別個の恋愛であることを示唆しているが、本研究もそれを支持する結果となっている。この結果を踏まえて考えると、今回作成した尺度は、松井の主張に即した形になっているといえよう。また、今回の調査対象はほとんどが大学生であり、とりわけプラグマ得点が低く、Table 5からもわかるように、プラグマ得点が第一位になる者がほとんどおらず、若い世代には該当しにくいタイプがあることが考えられる。それゆえ、Leeの言うような構造が支持されなかったのかもしれない。今後は、幅広い年齢層を対象に調査を行い、Leeの理論を検討していく必要がある。

次に、尺度から判定されたタイプと被調査者の的中感の関係を調べたところ、プラグマを除くすべての尺度で70%を超える者が「当たっている」と認識していることが示された (Table 5 参照)。このことから、この尺度が各タイプを的確に測定していると考えられる。しかし、データ数が少ないことや、今回のような的中感が客観的な指標となりうるかどうかについて疑問が残ることなど、この結果のみから、高い妥当性が得られたとはいえないであろう。

尺度の信頼性 (内的整合性) については、ルダスが $\alpha < .60$ であり、 $\alpha > .70$ の尺度がアガペ、マニア、エロスのみであったことから、ルダス、プラグマ、ストルゲには、十分な信頼性が保証されていないといえる。今後、この尺度を用いて研究を行う際には、この点に留意しておく必要がある。

以上のように、6つのタイプは弁別されるものではなく、また尺度の妥当性や信頼性にも問題は残る。しかし、6つのタイプ自体が理論的または思弁的な要素を含むものであり、これはやむを得ないことであろう。このような欠点を知悉したうえで、尺度を使用することが望まれよう。

パーソナリティ特性・社会的スキルとの関連について パーソナリティ特性や社会的スキルとの関連を調べたが、まずパーソナリティ特性については、協調性とアガペ、マニア、エロスとは正の、ルダス、プラグマとは負の有意な相関が得られた。松井 (1993b) は、アガペ、マニア、エロスを恋愛関係の進展に伴って高まる一般的な恋愛意識であると述べているが、そもそも恋愛意識は相手への愛情や好意に基づくものなので、これらが協調性と正の相関関係を有することは当然であるといえよう。また、ルダスやプラグマとの間に負の相関がみられたのは、これらが打算的で自己本位の、いわゆる「愛のない」恋愛であるとみなされたためであると考えられる。一方、ストルゲと協調性の間に有意な相関関係がみられなかったが、ストルゲが恋愛よりも友情に近い概念で、特に激しい愛着性を持たないために、関連性が低かったのではないかと考えられる。

社会的スキルとの間には概して相関係数の値は低く、個人の恋愛傾向は対

人関係を円滑に処理することとは無関係に形成されていくものであるということが考えられる。

性差・恋人の有無による恋愛傾向の違いについて 恋愛傾向の性差について、アガペとエロスは男子の方が、プラグマは女子の方がそれぞれ高いという結果が得られたが、アガペとプラグマについては、松井ら（1990）の結果と合致している。松井（1993a）は恋愛に関する諸研究をもとに、男女の恋愛の差異について論じ、男子はつき合っすぐの段階から恋愛に対するコミットメント（のめり込み）が大きいのに対し、女子は友人に恋人を紹介する段階まではコミットメントが低いこと、女子は結婚相手によって地位や収入が決定されてしまう場合がまだ多く、しかも適齢期が短いため、パートナー選択に関して慎重な態度をとりやすいこと、などを挙げている。これらのことから判断すると、男子は恋愛にのめり込みやすく、恋愛に対して理想主義的に考える傾向が強いのに対し、女子は感情に流されず、現実主義的に恋愛を進める傾向が強いと考えられる。それゆえ、今回の結果は、男女の恋愛傾向の差異を的確に表しているといえよう。

恋人の有無については、まず、恋人がいる群は他の2群よりもストルゲ得点が低いという結果が得られたが、ストルゲ自体が相手に対する恋人感覚の低さを示すので、「恋人がいる」と認識している者はストルゲ得点が低くなるのであろう。また、恋人が特にいない群は他の2群よりもマニアやエロスの得点が低かったことについては、彼らがとくに恋愛感情を持っていないために、嫉妬感を抱いたり、恋愛に対する理想を求めたりすることが他よりも少ないのであろう。さらに、片想いをしている人がいる群のアガペ得点が最も高かったことは、彼らが片想いの相手に振り向いてほしい、よく思われたいと思うために、献身的な気持ちを抱きやすくなるのではないかと考えられる。

引用文献

Byrne, D., Ervin, C. R., & Lamberth, J. 1970 Continuity between the

- experimental study of attraction and "real life" computer dating. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 157-165.
- Davis, K. E. 1985 Near and Dear : Friendship and love compared. *Psychology Today*, **19**, 22-30.
- Dutton, D. G., & Aron, A. P. 1974 Some evidence for heightened sexual attraction under conditions of high anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 510-517.
- Gross, L. 1944 A belief pattern scale for measuring attitudes toward romanticism. *American Sociological Review*, **9**, 463-472.
- Hendrick, S. S., & Hendrick, C. 1986 A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 392-402.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- Lee, J. A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulliten*, **3**, 173-182.
- 松井 豊 1993a 恋ごろの科学 サイエンス社
- 松井 豊 1993b 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, **64**, 335-342.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, **23**, 13-23.
- 村上宣寛・村上千恵子 1997 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, **6**, 29-39.
- 中村雅彦 1991 大学生の異性関係における愛情と関係評価の規定因に関する研究 実験社会心理学研究, **31**, 132-146.
- Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- Shaver, P., Hazan, C., & Bradshaw, D. 1988 Love as attachment : the integration of three behavioral systems. In R. J. Sternberg & M. L. Barnes(Eds), *The Psychology of Love*. Yale University Press. 68-99.

- Sternberg, R. J. 1988 Triangulating love. In R. J. Sternberg & M. L. Barnes (Eds.), *The Psychology of Love*. Yale University Press. 119-138.
- Walster, E., Aronson, V., Abrahams, D., & Rottman, L. 1966 Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 4, 508-516.
- 山際勇一郎 2001 他者の認知・他者への好意 好意・愛情 堀 洋道 (監修) 吉田富二雄 (編) 2001 心理測定尺度Ⅱ サイエンス社 Pp. 14-48.